

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

明けましておめでとーいございます

会長 村上 智雅子

皆様には、お健やかに新春を迎えられたことと思います。

昨年、令和七年(二〇二五)の国内の状況は、更なる酷暑と米騒動、高市早苗女性初の総理大臣の誕生と活躍、熊の人里への出現と脅威、北海道三陸沖地震など、枚挙にいとまがない悲喜交々の一年でした。

当会の昨年を振り返りますとまず、我孫子市の市制五十五周年記念事業の「市民と市民活動のマッチング」に二月に参加しました。当会としては、まずコロナで出来なかった嘉納治五郎銅像建立へ御協力頂いた会員並びに近隣の寄附者の方々、市長様、市関係者の方々へ御礼と御報告をしなければと思っていたところに、お誘いを頂いたものですから、喜んで参加しました。展示は役員全員の力を合わせて仕上げ、各団体との交流も新会員獲得もそれなりの成果を得ました。

五月の総会には第四二回文化講演会を白樺文学館長の辻史郎氏に『暗夜行路』に描かれた日本橋界限」と題して講演して頂きました。約百年前の志賀直哉の文章を精緻に読み解き、当時立て替えの途中であった日本橋の構造に触れ、東京の発展形態、産業技術史にまで言及されました。

この講演に付随して史跡文学散歩「日本橋界限を訪ねる」を六月に企画しましたが、雨天の予報で延期され

一〇月に。この日も雨のため、無理のない形で、越岡講師の経験豊かな語りに耳を傾け、和気藹々に行われました。



また、六

月には、「武者小路實篤と我孫子」と題して私が講演。我孫子在住が一年九ヶ月の短期間でありながら、想像以上の文学活動と「新しき村」の構想を練るなどの活躍をみせ、日向へ旅立つまでを中心に語りました。今、根戸に残されている旧武者小路實篤邸の公開を推進して

おられる我孫子の景観を育てる会と提携したこともあり、思いがけない盛況。やはり、垣根を越えて提携することの大切さと愉しさを味わいました。

一月には、産学官と市民が協力して企画された白樺芸術祭の一環として映画『暗夜行路』が上映され、会員や市民が多数鑑賞し、一二月には、生井知子先生の「新資料『暗夜行路』草稿を巡って」の綿密な構成の講演があり、教育委員会の稲村氏、辻氏そして志賀直哉のお孫さんで白樺芸術祭の代表の孫の山田裕氏の賛助講演も付いて、有意義な学びのひとときを堪能しました。

一二月には「我・孫・子と将門」を太田安則氏が放談くらぶで講演。壮大な日本の歴史の中で将門の活躍と生き様に新しい光を当て、はては我孫子の街おこしへの提言にまで、言及され盛り上がりしました。

全体的に見ると、昨年は、「白樺派について継続的研究・勉強」並びに「白樺文学館との連携強化」を掲げている当会に相応しい一年となりました。

今年も引き続き、二月の放談くらぶにて、白樺派の関係で、『暗夜行路』草稿を保存しておられた小熊太郎吉さんについて稲村隆氏に講演して頂く予定です。

以上、この盛り沢山な昨年は、前会長的美崎氏のご意志を継ぎ、多くの方に助けられながら、更に前進することも怯まず歩んで参りました。新年にあたって、互いに我孫子の魅力を広く深く、愉しく学び、発見し、発信して参りましょう。

新しい会員の加入を心からお待ちしております。そして会員の皆様、本年も引き続き、ご協力、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(写真提供：吉田哲会員「手賀沼遊歩道に昇る元旦の日の出」)

放談くらぶ

『我・孫・子と平将門 東端の島国
日本の古代史から読み解く』に参加して

佐々木 徹

【序】

「将門様は悪い人だったの?」

「都ではそう言われるだろう。だが…」

「あのサムライは民の話を聞いてくれた」「あのサムライは民の名を呼んでくれた」

「役人たちは消そうとしているが、手賀沼の水も風も土も、あのサムライの名を忘れることは無い…」

将門が去つてのち、村人たちは何を語つたのだろうか。

【講演】

二〇二五年一月二二日(日)、本年最後の放談くらぶ「我・孫・子と平将門 東端の島国日本の古代史から読み解く」に参加した。講師は太田安則氏。建築家として数々の著名な建築物を手掛け、都市開発の計画・事業化に活躍され、地元我孫子市では景観まちづくり、アートによるまちづくりに取り組んでおられるという、まさにマルチな才能と行動力の持ち主である。

太田氏によれば、千代田区の子どもたちとの街歩きで出会った築土神社、神田明神の考察をきっかけに、我孫子にとつての将門を考えていたところ、千葉日報に『令和の新将門記』を連載された勝又清和氏と出会った。氏より、「感じたこと・思ったことを、すすめていくと面白い」と言われ、「将門スピリット」が地域を特徴づける大きな要素になるのではないかと思ひ、これを出発点に仲間と共に「親子の日イベント」で将門をテーマにした座談会を企画した。それ以降深く調べ、考えてきたとのことだつ

講師の太田安則氏



た。参加者を驚かせたのは、講師の母親が将門を討つた依藤太(藤原秀郷)の血筋だという話である。講師は何かに通るであろうかと、不思議な思いにとらわれたほどである。

講演は、まず初めに『現代に生きる将門イズム』という映像作品を使い、相馬野馬追の勇壮な騎馬姿を通し、「ここにはサムライが息づいている、遠く将門から続くDNAを感じる」とされた。

次に、この講演は田中英道氏、いいのまち氏、茂木誠氏など先人の仮説を「再構築」し、「我孫子版」にしたものだと説明があつたのち、スライド資料も活用しながら話が進んでいった。

前半は、日本の古代史の仮説を「再構築」され、日本の成り立ちに触れられた。古代、東国に「日高見」と呼ばれる国があり、それは豊かな生活と西国とは異なつた信仰・精神世界を持つた広大な国だつた。縄文後期の人口を約一六万人とし、東国に一四万人と大半が居住するほど豊かな土地だつたとする説が紹介された。また、国生み神話も再構築され、筑波周辺にあつた高天原の二神こそイザナギ、イザナミであるとした。さらに、日高見に一一年以上続いた共生社会を伝えるため、紀元前六六〇年ころ、三ギを九州へ、ニギハヤヒを畿内へと派遣したのが「二つの天孫降臨ルート」だとし、これにより「天孫族」の統治する日本国が生まれたとされた。そして、将門の時代にも「天孫族」の統治は続いており、受け継がれた縄文のDNAが将門を乱に向かわせ、更には将門、千葉

氏、相馬氏の系図をもとに、冒頭の映像紹介にあつた現代の相馬にもDNAが受け継がれているとした。

後半は、講師の言われる「我孫子版」である。我孫子市内の日秀西遺跡の発掘調査によつて、この地が古代相馬の中心地であつたことは学術的にもほぼ確定している。講師は、筑波山から広がるこのエリアに鉄器生産や馬の生産・放牧地があつたことから、「兵士発祥の地」との考えを示された。一〇世紀前半には、豪族の荘園拡大などで律令国家が立ち行かず終焉を迎えた。そのような時代の変革期に、「国生み」「神生み」の下総と常陸でも民の暮らしは苦しく、豪族も土地をめぐる争いを繰り返して治安が悪化していった。

そこに登場したのが将門である。民のために立ち向かう指導者のDNAは、遠く縄文から日高見を経て将門に受け継がれたのではないか。そして、それは将門から相馬へと繋がっている。古代の相馬、我孫子というアングルから見た将門を「共生社会の象徴」としたうえで、太田氏は講演の結びに「縄文のDNAによつて相馬、常陸から世直しは始まっている」と述べた。

【太田氏の思い、「これから我孫子」】

講師の太田氏は、将門を単純な「反逆者」や反作用としての「伝承上の英雄」のいずれにも押し込めず、東国の



35名の参加者が集う放談くらぶ
平将門人気には高いものがある



開拓者、中央権力とは異なる価値観を持つ共同体・共生社会の精神的支柱とした。

これは、近年の将門研究に立脚した流れだった。また、中世のある時期だけの登場人物とせず、はるか縄文から続く「自立と多様性を持った共生社会を支える精神構造の中で、将門伝説とDNAが受け継がれていたとした。

その後、太田氏は積極的に新解釈を加え再構築していった。話は我孫子や将門を飛び越え、古代日本の成り立ちやルーツにまで及んだ。講演のタイトルにもなっているが、「我・孫・子」を古代へブライ語で解釈する方法は、一般的な解釈とは大きく離れている。しかし、「我らの先祖たち」の「中心地」と意味づけることによって、水運・陸運の交差点であり、それゆえ古代東国の重要拠点だったという事実上の我孫子の意義、役割に深みを与えていると考えられる。これまでの将門研究を集積しながら一般には疑問視されたり、一部誤解されたりする可能性のある新解釈も、むしろ挑戦的に用いていると感じた。「古代へブライ」、「縄文の共生社会」、「筑波の神」、「日高見国」、「中世の将門」、「将門の後裔と称する千葉氏、相馬氏、その他」、「その後の関東」、そして今、私たちが住む我孫子という、まさに多層的な歴史観を示された。思索・探求の範囲がそこまで広がったのは、太田氏の熱量の産物だろう。時間の流れだけではなく、多層的に捉える解釈は、まるで日秀西遺跡の多層（一から四層）を見るようである。

「我・孫・子」が本当に古代へブライ語か、筑波が本当に日本のルーツなのか、相馬氏が本当に将門の血脈か。いずれも様々な論点がありそうだが、そこは太田氏の講演の本質ではなく、価値は変わらないと考える。

我孫子市における将門研究や歴史的関心と活動（歴史散歩などを含む）は、特定の結論に収斂させようとするものではなく、誰もが参加可能で多様な視点から検討され続けている。

将門への関心が地域理解の動機となっており、歴史を「学ぶ」だけでなく「自ら考える」場としての我孫子となればよいと思う。

私たちの町、我孫子がどのような町だったのか、これからどういう町になっていくのか。縄文から続き将門にも受け継がれ、きつと今も生きているはずのDNAで「世直しが出来る」というのが、まちづくりのプロである太田氏の提案だったと思う。

「出でよ、現代の変革者！」と、太田氏は叫んでいるのだと感じた。

新人会員紹介

ご縁に繋がれて

大井 恵理子

今年の夏、たまたま思いついてサイクリングに出かけ、手賀沼周辺を巡り、将門神社まで、足を伸ばしたことがありました。生まれも育ちも地元の人ながら、この歳になるまで将門のことを全く知らずにいた自分を不甲斐なく思っていたところ、これもまた、たまたま我孫子の地域新聞で本日の講演を知り、是



非同わけて頂きたいと電話で申し込みました。

「我・孫・子と将門」については、講師の太田氏がいける方に出会い、書物を読まれてご自身の考察を纏められ、壮大な歴史の中での将門の活躍ぶりや生き方を話されました。「相馬野馬追」の映像も分かりやすく、レベルの高い話ながら、話の内容も立体的に構成されていて、大変興味深く聞かせて頂きました。特に、私が信奉している田中英道先生の「日高見国」の説について話されたので、更に引き込まれました。少し田中英道先生のことに触れますとー私が日本の文化や歴史の素晴らしさに目覚めたのは、ほんの二、三年のことでした。その中で、田中英道先生の本に出会い、その時受けた衝撃は、非常に大きなものでした。自分の受けた感動を家族に伝えても家族は歴史や文化に興味を持っていなかったため、ただ、鬱陶しい思いをされただけでした。仕方なくひとりで本を買いあさって読んだり、博物館を訪れたりしただけでした。まさか放談くらぶの講演の中で、田中英道先生がこんなに丁寧に紹介され、言及されるとは、思いませんでした。驚き、感動し、田中英道先生を学生時代から知っておられたと言われた司会の村上さんに話しかけてしまいました。そこで、我孫子の歴史や将門に関心をお持ちでしたらと入会を勧められて、自分でも驚く位早く入会を即決させて頂きました。

太田氏の広く深いお話や、今年お亡くなりになってしまった田中英道先生の思いがけない「日高見国」のお説との出会い、また、この夏将門神社に訪れたことなど三つご縁の繋がりに感謝しました。

こんな私ですが、宜しくお願い致します。

（令和七年十二月入会）



将門神社 (omairi club より転載)

〔連載16回〕

《世田谷の頃、原田京平ファミリーを知る・

その7の3 世田谷育ちの「はたおり虫」

―染織家・原田麻那(まな)ミニ評伝―

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地

(現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘
四一九―三三六) 探訪・取材の記

平林 清江(きよえ)会員

平成十七(二〇〇五年)十一月三日午後の事であった。
「原田聚文」の次女で、アメリカ国籍ニューヨーク在住の
洋画家原田南氏が、ご自身の誕生の地、我孫子弁天山
志賀直哉邸旧跡を訪れ、さらに旧白樺文学館を訪ねて
下さったのである。実に、南氏誕生以来八十年ぶりのこ
とであった。

当時、茨城県笠間市芸術村で創作活動をしていた南
氏の姉麻那が、水戸市の病院で療養中であったのを看護
されての帰り道、ふと「自身の誕生の地を想い出されて
のことであった。

南氏が旧白樺文学館を訪れたこの日、応対し、その後
も連絡を取り続けたのは、当時同館スタッフの矢野正男
氏であった。アメリカに帰国された南氏に、弁天山志賀
直哉邸旧跡・旧白樺文学館にて撮った写真を送った。そ
の後音信が途絶えていたが、平成十九(二〇〇七年)年六
月二十七日、突然南氏から、矢野氏の元へ国際電話が入
り、交信が始まった(南氏はプリペイド・カード使用、朝
七時頃南氏から矢野氏へ電話がかかり、カードの充電が
無くなるまでの三〇分ほどだそうである)。実に十一回
(平成一九年六月二十七日〜同年八月三十一日)に及ぶも
のとなった。この時点で、矢野氏が南氏から知り得た情
報は次のような内容であった。

「原田聚文の本名は、原田京平(はらだ きょうへい)と
言い、明治二十八年十月現 浜松市生まれ、日本美術
院洋画部出身で春陽会所属の洋画家である。雅号は三
つ有り、「恭平・聚文・和周」である。

京平の妻は、「睦(むつ)」と言い、女子美術学校(現女
子美術大学)出身の画家である。

原田京平は、その日本美術院時代に、同期の村山槐
多らと共に、『雑誌白樺』が発信する熱と波を被ってお
り、白樺同人が住む土地への憧れから、また、静養とを
目的として、大正十年十月東京から我孫子に移った。初
め子ノ神の島田久兵衛別荘に居住したことが分かって来
た。当時我孫子町弁天山に居住していた志賀直哉とそ
の家族とは、家族ぐるみの交際をしたが、そのことは志
賀の大正十一年の日記『志賀直哉全集』第十三巻 日記
(三二(二〇〇〇)年二月 岩波書店)に詳しい。また、我孫
子では、娘二人に恵まれた。後に染織家となった麻那、
洋画家となった南である。

また、志賀直哉一家が京都に転居した大正十二年三
月頃から、留守番として志賀邸母屋に移り住み、昭和
三年三月、東京世田谷若林に移転するまでの六年余を
この地で暮らした。本業は画家であったが、京平は短歌
も作っていて、昭和十一年一月逝去後、妻睦によつて「原
田和周」の筆名で歌集を一冊刊行している。「雲の流れ」
であるというものであった。

やがて、矢野氏は、南氏の信用を得て、原田喬氏と直
接連絡をとることが出来るようになったのである。

原田喬氏は麻那の御養子で、京平・睦の作品や関係資
料、及び麻那の作品等の継承者である。実は、平成十九
年の末、筆者も一度だけ、国際電話で南氏と話す機会
を得た。その日、南氏から旧白樺文学館に電話が入った
のである。あいにく、矢野氏が不在で、筆者がお相手を
させていただいた。僅かな時間であったが、「日本が懐か
しい、日本語が話したい」と語られたことが今も印象
深く残っている。色々尋ねたいことがあり、平成二十(二
〇〇八)年一月十四日、南氏あてニューヨークの住所に

手紙を送ったが、御返事は無く、平成二十年に逝去さ
れたことを後に知った。

その後も、原田喬氏と矢野正男氏とのメール交信が
継続され、いよいよ、平成二十二(二〇一〇)年十一月
二十日、矢野氏と筆者は喬氏のご自宅に伺い、喬氏所
蔵の原田京平・睦の絵画や書簡などの資料、そして麻那
の作品などを拝見することになった。南氏が平成十七
年十一月三日に我孫子弁天山志賀邸旧居跡、旧白樺文
学館を訪ねて以来、実に五年の歳月が経過していたので
ある。

以後、「原田京平・睦夫妻及びその二人の娘麻那・南に
かかる調査、研究」が、一段と進むこととなったのであ
る。東日本大震災直前の平成二十三(二〇一一)年三月
六日、原田喬氏が、初めて我孫子を訪ねられた際、それ
までに我孫子市白樺文学館に預けられた、原田京平と
その家族の作品及び書簡などの資料について、「寄託資
料リスト」及び「解説書」を作成するよう仰せつかり、二
年半ほどの調査期間の後にまとめたのが、「原田京平研
究 原田喬氏所蔵資料から見た画家・歌人原田京平の
芸術活動と交友」私家版(平林清江 平成二十五(二〇
一三)年十一月二十日)である。原田喬氏にとり、本名
である「京平」が最も親しみがあるということから、題
名を「原田京平研究」とさせていたしたのである。

〈手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)と、彼が招
いた歌人達〉(平林清江「我孫子の文化四十年の歩み」
令和三年四月二十六日発行、我孫子の文化を守る会、
発行者美崎大洋)

*原田南が我孫子来訪時、矢野氏が撮影した写真が
ある。図録「我孫子・白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯
―」I3pに掲載。なお、同誌表紙には、我孫子志賀直哉
別邸の庭で撮影された家族写真(京平・睦・麻那)も掲載
されている。

原田麻那(はらだ まな)

大正十一年(一九二二)一月一七日、千葉県我孫子にて生まれる。

父、京平(静岡県出身・洋画家 春陽会会友)。四〇歳で病没。

母、睦(東京都出身・洋画家 国画会会員)。八八歳。

昭和十四年(一九三九) 明星学園高等学校卒業。

昭和二十三年(一九四八)柳悦孝に師事、草木染及び化学染料による手染手織の染織工芸を学ぶ。

昭和二十四年(一九四九)国画会工芸部に出品、入選。

昭和二十七年(一九五二)国画会で国画会新人賞受賞、会友になる。

昭和三十三年(一九五八)国画会会員となる。一九五一年より独自のスタイル(のしめ)の着物を制作。題材は万葉集、雅楽、西域、俳句、海、雪など自然のイメージより抽象化したものが多い。

昭和四十一年(一九六六)綴の壁掛を制作、ジャパン・アート・フェスティバルに連続招待出品。タピストリーがシカゴ美術館買い上げとなる。茨城県笠間市芸術村に工房を建築転居する。

昭和四十六年(一九七二)「新世紀展」(京都国立近代美術館主催)に招待出品。着物(故地)〈異域〉(月は東)〈落暉〉 京都国立近代美術館買い上げとなる。

昭和四十九年(一九七四)着物(豊幡雲)山種美術館買い上げとなる。

昭和五十二年(一九七六)「全日本新人染織展」の審査員となる。

昭和五十四年(一九七九)〈天地玄黄〉綴タピストリー完成。KDD新宿会館一階ホール、ロビーラウンジ壁面。着物(雪月花)東京国立近代美術館工芸館主催展に招待出品。

平成一〇年(一九九八)五月、初の作品集『原田麻那の染織』を求龍堂より出版。九月〜十月、水戸市藝文

ギャラリーにて、「原田麻那展―遙かな異国への憧れを織る」開催。

平成一八年(二〇〇六)七月二十五日、水戸市にて逝去。

享年八十四歳。原田喬氏の義母。

「原田麻那の染織」(一九九八年五月二十六日初版、

原田麻那著 足立龍太郎発行)などを基に作成。

【注釈】

(注1)我孫子町に生まれ、原田麻那の両親、原田京平・睦夫妻は、大正十年十月に東京目黒から千葉県我孫子町に転居した。その目的は身体の弱い京平の静養であつたが、京平の日本美術院洋画部時代に『白樺』の影響を受けていた京平にとり、当時白樺派の有力な三人が住んだ我孫子において、画を描くことも重要な目的であつたようだ。

白樺派で、我孫子に家を持つたのは柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤の三人だが、志賀以外のふたりは既に我孫子を去つていた。それ故、志賀が我孫子を去る大正十二年三月まで、志賀と原田の間では密接な家族ぐるみの交流が行われたのである。

志賀の大正十一年(一九二二)の日記には、原田夫妻は、多数回登場している。

次に記すのは、同日記の大正十一年一月の記録で、麻那の誕生のことが描かれている。

・大正一一(一九二二)年一月一六日 月

晴 午前中より離れに入っていたが、仕事出来ず、一寸昼寝、
夜も早く寝、夜十時半、原田君の所から車夫迎ひに来て、篠崎急いで出かける、

・大正一一(一九二二)年一月一八日 水

雪 寒 午后三枚程書く、夜風邪気、
夕方原田氏の所から児玉さんの方を散歩する

雪の降る中を歩く内あつくなる

前夜十一時原田氏の所で女兒安産 ブルジェーその他を見る、日本の人と似たり寄つたり、

十一時過ぎより康子腹いたみ出す、皆起きて、出産の用意をする、

雪五六寸積もる、〔予記〕タンク此日より使へる、

・大正一一(一九二二)年一月二八日 土

晴 温 一昨日より神経痛悪し、仕事も出来ず不愉快、午前六時就眠、九時半起床、午后二時就寝、五時半起床、

万亀子七百メ強は六百九十メが本統(ママ)にて、今日又計る

七百五メ、原田氏赤児タン毒にてはなきかと篠崎いふ心配、その為

橋本上京

〔発信〕山脇、我孫子へ来る事をすすめる、〔受信〕利弦、有島

*篠崎：志賀家の看護婦(産婆)、篠崎リンのこと。大正一二年三月、志賀家が京都に移住したのに伴い、直哉を慕つて行つた作家の瀧井孝作と京都で結婚した。

*万亀子：志賀家の四女。大正一二年一月一九日(木)午前六時二六分誕生。

『志賀直哉全集』十三卷「日記」(二〇〇〇年二月岩波書店)

*麻那の「年譜」には大正一一年一月一七日誕生とあり、志賀の日記と整合する。この頃は原田夫妻は志賀邸ではなく、島田久平衛別荘(我孫子町子ノ神・ねのかみ)我孫子町に於ける別荘としては草分け的な建物で暮らしていたことが、京平の友人からのハガキによつて、実証されている。

だが、原田喬氏から教えていただいたことには、戸籍謄本には、「大正拾老年壹月拾七日千葉県東葛飾郡我

孫子町弁天山三番地で出生父原田京平届出昭和貳年拾月六日受附入籍」とあり、麻那もミナミも同日に届け出ている。原田京平としては、「志賀邸で生まれた」ということへの思いと「かわりがあつたかと解釈できようか。また、前出のDVDのなかでも、麻那は、「私が生まれたのは志賀直哉先生の家」と語っている。

(注2)我孫子町手賀沼畔：密なる交友をした志賀と原田京平であつたが、やがて志賀は「本統に芸術に浸りきつた、生活で心身を統一され」(日記大正十一年十二月四日)、書く気力を取り戻すことを目的として、大正十二年三月京都へ去る。その後、京平・睦夫妻が弁天山志賀邸母屋に移り、昭和三年三月、東京世田谷若林に転居するまで暮らすことになる。この弁天山志賀直哉邸(弁天山三番地)は、手賀沼のすぐ畔にあつた。

資料紹介「瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料」

『上智大学国文学論集』第48号 上智大学

国文学会(平林清江 二〇一五年一月八日発行)

(注3)清水明子先生(しみず あきこ)：一九四六〇染織作家。女子美術大学名誉教授。北海道に生まれる。

一九六九 女子美術大学芸術学部美術学科工芸専攻卒業。柳悦孝工房研究助手。国展(国画会主催)出品以後毎年出品。

一九七三〇女子美術大学非常勤講師、専任講師、助教を経て九四年に同大学教授に就任。

国画会新人賞受賞(七六年国画会会友、八六年同会会員)

一九七五・八 個展(東京)

一九八二 グループ展「紬・緋女流新人作家十人展」

(東京)

一九八五 グループ展「織りの音 五人展」(東京)

一九九〇 企画展「現代日本テキスタイル米国巡回展」

二〇〇〇 和光ホールにて個展

二〇一〇 女子美術大学名誉教授

二〇一一・九・二八〜一〇・四 銀座和光にて二回目の個展「清水明子染織展―季節の薫り 風にのせて―」著書「糸染と織の技法」(講談社)

(注4)杉並時代：麻那の「住まいの変遷史」のようなものを記すと、その八十四歳の人生で、転居をくりかえしている。

大正十一年一月に千葉県我孫子町にて誕生し、当時志賀直哉の別邸であつた、手賀沼畔の弁天山三番地に住む。昭和三年三月、小学校入学と同時に両親と妹南とともに上京し、先ず世田谷若林に転居、その後、昭和五年三月、同じ世田谷の五丁目二八四九番地に移った。両親が、三〇〇坪の土地を購入しアトリエ兼住居(「聚文画室」)を建てて落ちついたのである。昭和十一年一月に父親の京平が病氣のため逝去。昭和十九年十二月「聚文画室」を売却した。戦争激化のため、二十年四月には、疎開せざるを得なかつたので、神奈川県相模ダムのそば(吉野町)に移つたのである。終戦と共に、同年十二月三十一日に東京に帰る。東京の何処に戻つたのかは、不明であるが、その生活ぶりは「間借りをして、麻那と南の洋裁で糊口をしのぐ」とある。

昭和二十五年十二月三十一日、杉並区東田町(二の一九三)に家を建て、転居。この頃から、母睦は絵を描くことに専心し、麻那は織りに専念する。

同四十一年六月、茨城県笠間市芸術村にアトリエ・工房を建築転居。ここが、睦と麻那の終焉の場所となる。麻那の年譜を熟読すると、実際何処に住んだのか、正確には分からない期間がいくつかある。

* 原田喬氏のお話によると、昭和四十一年麻那がアトリエを建築する場所を選定する際、誕生の地である「我孫子」も候補に挙がつていたということだが、結局笠間市の芸術村になったということである。その理由は、未だ伺っていない。

(注5)「ざんざんざん織」「ざんざんざん」は、松風の音を表現したもの。

「ざんざんざん織の歴史」：静岡県浜松市の平松実(ひらまつ みのり)が創作した紬の絹織物。平松実は、昭和三年、柳宗悦が提唱した民藝運動の一翼を担わんと、工芸的織物の創作を始める。

「ざんざんざん織」の特徴：糸は、二頭の蚕が共同で作った繭から取る糸(玉糸)と普通の糸から作るため、糸そのものに変化があり、そのムラがざんざん織の特徴である。この繭は人の手でしか糸にならないため、値段が非常に高くなる。織りは、昔ながらの手機手織で、近代的な器具は一切使用しない。

品物は丈夫で風合いがよく、自然のつやと絹独特の美しさが生まれる。「ざんざんざん」「ざんざんざん織」は(有)あかね屋の登録商標。あかね屋でしか製造していない。

『工藝』第26号(昭和八年二月一五日発行)に(同人雑録)という欄があり、その中の一つに平松が執筆した(通信 遠州あかね工房より)という記事があるが、ざんざん織の見本は挿入されていない。

ざんざんざん織の見本については、日本民藝館にも所蔵が無いとのことである。

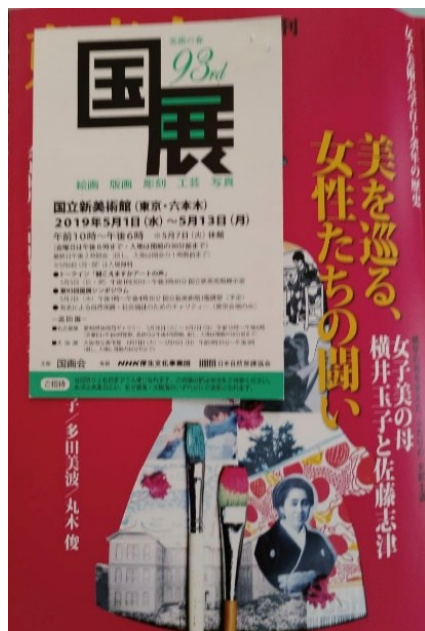
【平松 実】あかね屋初代。明治三〇年生まれ。昭和四年、ざんざんざん織を始める。昭和六年、東京美術館の国展で初入賞。銀座資生堂画廊で第一回展開催。昭和五九年、死去。

(以下、次号 その8に続く)

あとがき

今日は令和四(二〇二二)年六月二四日である。

今年の二月二四日に、突然ロシアが、ウクライナに軍事侵攻して四か月が経過したが、この戦争はまだ終結せず、数年に及びそうだとのことである。



第93回国展の案内状と雑誌「増刊東京人」
(2014年11月13日号)の表紙：著者提供

ロシアが黒海を封鎖しているので、農業国ウクライナの小麦が輸出できず、世界的食料危機とのことである。世界的な物流の不安により、相次ぐ食料品・燃料の値上げ(何でもかんでも)で、庶民の台所を直撃している。感染者が減少しても収束しないコロナ。

そろそろ、戸外ではマスクをはずしても、などとの声もあるが、まだまだ人々は用心深くマスクを取らないで行動している。日本人のこの用心深さと潔癖性があるから、感染者の人数もおさえられているように思える。来月には、四回目のワクチン接種も始まるようである。新しいワクチン、「ノババックス」とやらが登場し、これは副作用が少ないことが期待されている。

さらに、コロナ以外の新しい感染症の流行のきざしがあり、心配されている。人々が心から安心のできる日々は果たして訪れて来るのであろうか？

今年の夏は非常に暑いとの予想で、実際ここ数日も猛暑で、熱中症患者が救急搬送されるニュースがよく聴かれる。その上、国内で頻発する大小の地震への恐怖が人々を苦しめている。

このような状況の中で、牛歩の歩みながら、本シリーズも《その7》まで進んで来る事ができた。人生で一番の楽しみ、友人との語らいができないので、それ故に一人の作業に集中できるからなのである。何とも皮肉なことではある。

さて、本稿は、清水明子先生、綿貫倫子氏、その節の御同行のご友人、三ツ木知昭氏との出会いに恵まれ、この方々のお力添えがあったから、不完全な内容ではあっても一応まとめることができたのである。

御世話になったまま十年も経過してしまい、お詫びの言葉もないと、気がつき、《その7》も、まがりなりにも、筆者が知り得たことは記し残しておかなければならないと思いついたのである。

そして、書き終えて振り返れば、「染織家原田麻那」の客観的なデータの羅列で、やはり「麻那の人間像」に迫ることはできないことであつた。

筆者の力量不足・関連資料の乏しさを嘆いてみても致し方なく、今後の原田麻那の研究者に期待するばかりである。御世話になった方々には申し訳ないことであるが、これにてお許しをいただくほかはないという心境ではある。

本文でも御名前を挙げさせていただいたが、あらためて御名前を記して、感謝の意とさせていただきます。いつか、また国展の会場(国立新美術館)にて再会が叶い、皆様の作品を拝見したく願っております。どうか、その日まで、皆様お健やかに過ごして頂きますように。ありがとうございます。

令和四年(二〇二二年)六月二十四日

令和六年(二〇二四年)年五月補筆

手賀沼統一クリーンデイに参加して

村上 智雅子

手賀沼公園の樹々を透かして抜けるような群青の空のもと、二月七日(日)美手連美しい手賀沼を愛する市民の連合会主催の手賀沼クリーンデイが開催されました。



手賀沼公園の無目的の広場には、若いボーイスカウトから、八〇歳代の方々に至るまでの総勢二一〇名の方が居並ぶ前で、

まずは実行委員長の関口隆彦氏の朗々たる開会の言葉に始まり、次に星野順一郎市長から挨拶がありました。

「今日は、沢山の方々にご参加頂き、有難うございます。かつて汚れていた手賀沼も今は、水質汚染ランク第五位となりました。今日の皆さんの働きで、また一層綺麗になるでしょう。水辺の作業は、大変です。足元に気をつけて滑らないように、お励み下さい。」

次に岡本輝美さんから丁寧な作業の説明があり、それぞれの担当場所へ。

文化を守る会は手賀沼公園湖上園前に集合し、野口隆也さんより作業内容を聞きました。柵内の下のグループは沼地の外来植物の駆除を、柵外の上のグループは私達で、下から持ち上げられたプラスチックケースに入



【写真3枚は佐々木徹会員撮影提供】



れられた外来種の草などを水きり穴の空いたビニール袋に詰め込み、集積場に運ぶ仕事でした。

当会からの参加者は、越岡さん、佐藤さん、川上さん、渡辺さんと私の女性五人と新入会員の佐々木徹さんの総勢六名。

時々、泥はねにあいながら奮闘。ぎっくり腰が治りきらない私は、ゆつくりと程々に働き、何とか一時間程作業し、

講座の当番発表があるため、若い頼もしい方々にお任せして、帰途につきました。

手賀沼に目をやると、群青の空を映した沼の波は眩しい程に煌めいていました。

日頃から我孫子の景観は、手賀沼の風光明媚さに寄るところが多いと感じています。その大切な手賀沼を労うために、一年に一度位は、市民の有志が清掃することは、有意義なことと思いました。

胴長を身につけ泥まみれになりながら活動された方々、朝早くから TENT を張り、諸準備された美手連のスタッフの方々、本当に有難うございました。

会誌掲載

日韓ロングステイの取り組み

海津 いな

市制五五周年の節目の年は、戦後八〇年そして日韓国交正常化六〇周年の年でもありました。

そこで年末に、前天皇の誕生日記者会見（二〇〇一年一月）を思い返していました。四半世紀前に、韓国との関係は今のよう文化的自由度の交流はなく、教科書問題が取り上げられて穏やかならざる事情でした。その際に、記者が「韓国との関係・歴史についてどう考えるか」という質問に、明仁天皇が「百済系の血を引いていることに親しみを覚える」とのご発言をされました。歴史を確かに抑えていなければ公に表現しづらいことでした。つまり、桓武天皇の母・高野新笠が百済系出自であると、史実として認識を示されたのでした。非常に踏み込んだ内容でありながら、官僚的な言い方ではなく、親しみを込めつつ、慎重に言及されたのです。

上皇陛下は、若い頃から歴史学・生物学に関心を寄せられ、古代史への造詣も深いので、渡来系氏族、日本文化の形成過程についてあえて発言されたのでしょう。古代において、国境の意識がない頃でも、日本に進んだ渡来文化を積極的に取り入れ国造りされたのだと考えられます。七～八世紀の日本は律令国家を作るため、外来知識を取り入れたのです。その知識の多くが百済、高句麗、新羅などから来た渡来系知識人でした。例えば、我孫子でも、この頃に話題になる平将門については、桓武天皇四代の皇胤であり、平氏の姓を授けられた高望王の孫であり、騎馬、製鉄の技術革新を率先したので、地域統合に繋がっていたと想像されます。

では、千葉と朝鮮の繋がりがあるのかと、県立高校の先生方とやり取りするようになり、柳宗悦の研究が私との共通項になっていたことから、二〇二五年には日韓

交流事業に協働することになりました。地域レベルでの日韓交流に長年努力してこられた高校教師の方々は、柳宗悦夫人・兼子の顕彰碑を建立したいと考えていた折りに、美崎大洋会長（当時）に話すと、「僕は韓流が好きだから、いいと思いますよ」と懇意になり、ついには『四〇周年記念誌』（二〇二二年）への寄稿となりました。もっとも、先生方の記念碑設置は多忙な最中になかなか進まず、まずは我孫子市教委へ二十万円程を寄附をした、とか。これまでに、高校生の韓国ホームステイ事業を続け、今回は韓国からのロングステイとなりました。

この度、我孫子を訪れ、二週間のロングステイをされた韓国の方たちによると、この頃の韓国では、「韓日歌王戦」というTV番組が視聴率一位になるほど、日本の歌



市民プラザでの書道展を見学する韓国の大邱(テグ)からのお二人と筆者(右)

が大変に喜ばれ、YouTubeで配信されていると教えてくれました。ネットで見ると日本語の歌に感涙する様子もわかるのです。そして、日本では、ついに『冬のソナタ』特別編集の劇場公開映画が二〇二六年に公開されることになっています。近くて遠い

「稲村雄談—志賀直哉と小熊太郎吉—」

白樺文学館 主任学芸員 稲村 隆氏

あひだより121号

放談らぶ

現在の韓流と同様に篤いもので、流石の「推し」といえます。なんと、日本文化の万葉集においても、表現の基盤に百済文化の「人的流入」も認められると言われているのですから、韓国との多文化認識を深め、隣国との友好関係がウマく行く年になるように期待しています。



旧村川別荘にて、大邸(テグ)の方々(左・後)と当会の役員2人(越岡・佐藤)

国と言われた時期もありましたが、平和で豊かな両国関係が築かれるようにと思います。大正の時期において、柳宗悦・兼子夫妻は、朝鮮半島の美しい文物、貴重な歴史を重んじ、バーナード・リーチと共に感銘を受けました。一〇

〇年前の時代にして、その時の熱量は、
 翌年より提灯屋、剥製、昆虫標本作業を稼業とし、剥製制作の修行は二年に及んだという。大正三(一九一四)年〜大正一二(一九二二)年、柳宗悦、志賀直哉らと交流し、元来関心のあったと思われる文学、文芸活動も行っている。この頃報道された『暗夜行路』の草稿ノートを託されている。
 一九二二(大正一〇)年三月我孫子町会議員に当選、一九二四(大正一三)年二月に辞職するまで務めた。その他市内八坂神社、香取神社の社務運営にも参画。また自然科学への関心が顕著であり、晩年一九四〇(昭和一五)年に布佐地区での「セミタケ」の発見や、一九四二(昭和一七)年の「オニフスベ」の発見は、東京科学博物館(現国立科学博物館)にも注目され、新聞報道では、「街の昆虫学者」「和製ファール」などと称された。一九四三(昭和一八)年一〇月一

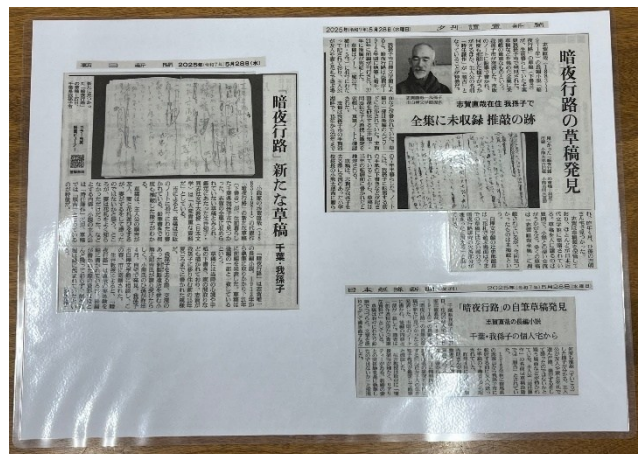
小熊太郎吉(一八七四〜一九四三)は、明治七(一八七四)年六月一八日岡発戸村(現在の我孫子市岡発戸)の渡辺太郎左門家に、運蔵、ゆりの長男として誕生。独学で教員検定試験に合格後、柏、市川の他、我孫子町高等小学校(現我孫子市立第一小学校)に赴任、同校在職中の明治三二(一八九八)に結婚し、婿養子となり渡辺から小熊姓に変わる。その後船橋、松戸にて校長を務めたが、明治三五(一九〇二)年、郡視学(地方教育行政の監督官)と教育上の問題で論争となり、信念を通すため、退職。



講師の稲村隆 主任学芸員

一九二二(大正一〇)年三月我孫子町会議員に当選、一九二四(大正一三)年二月に辞職するまで務めた。その他市内八坂神社、香取神社の社務運営にも参画。また自然科学への関心が顕著であり、晩年一九四〇(昭和一五)年に布佐地区での「セミタケ」の発見や、一九四二(昭和一七)年の「オニフスベ」の発見は、東京科学博物館(現国立科学博物館)にも注目され、新聞報道では、「街の昆虫学者」「和製ファール」などと称された。一九四三(昭和一八)年一〇月一

『暗夜行路』の草稿発見を報じる新聞
 白樺文学館内の展示から



ていくという我孫子への強い郷土愛があったように思われる。特徴的な資料を紹介し、現段階での分析になるが、我孫子の教養人としての思いを探ってみよう。

日時 二月二日(土)午後二時〜四時

場所 II アビスタ第2学習室

所在地 II 我孫子市若松二六―四(市民図書館二階)

現在、白樺文学館において『暗夜行路』草稿初公開記念として三月一日まで『暗夜行路』の軌跡展が開催されています。また、二月二日までの毎週水曜日から三時まで、講師の稲村隆氏(学芸員)による展示解説と市民スタッフによるピアノ演奏と朗読が行われています。

入館料: 300円(高校・大学生200円)

問合せ: 白樺文学館 04(7185)2192

所在地: 我孫子市緑二丁目十一番八号



九日死去、享年六九。

現在白樺文学館に寄贈された小熊太郎吉関係資料は約五〇〇点。資料から太郎吉は実に多彩な活動を展開していることが読み取れる。その活動の背景には郷土の歴史、文化、自然を後世に伝え

第五六回「短歌の会」(最終採択の二首)

一月二五日開催

木犀の香る朝なり過ぎし日の

猛暑も忘れ熱き茶を飲む

病葉の落ちてカラカラ飛んでゆく

ふいに淋しさわきくる夕べ

納見 美恵子

冥土にてやあこんには会える日を

待っていてねと願うこの頃

一人だけ健在なりし恩師だと

卒寿をいわう計画ありき

前原 安世

高僧の庭より貰いし菊の花

あちこち咲き出で仏前賑わす

心穿つ言葉紡ぎて歌詠みし

佳人よ更に天にて歌え

村上 智雅子

秋忘れこころとのふ曝涼の時は

すぎゆき季節の息なし

張り詰めた水面に映る空と葦

手賀の沼には鴻雁来たり

曝涼(ばくりよう) 二虫干し、

鴻雁(こうがん) 二白鳥

佐々木 侑

柿色に染まる夕日に富士の影

手賀の畔の枯れ尾花

カーテンの窓の向こうの曼珠沙華

風に揺られておいでおいでよ

芦崎 敬己

当会の行事予定

□ プロジェクト「短歌の会」

第五七回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 一月二七日(火) 13:30

第五八回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 三月二四日(火) 13:30

◎短歌を初めて学ぶ方、一緒に仲間になって、短歌を楽しみませんか。(参加費無料)

問合せ ☎(090-5333-1804) 村上

□ 「放談くらぶ」

日時 二月二一日(土) 一四時〜一六時

場所 アビスタ学習室2 (市民図書館2階)

演題 小説「暗夜行路」の草稿と小熊太郎吉

講師 稲村 隆氏 (白樺文学館主任学芸員)

参加費 会員無料 (非会員300円)

問合せ ☎(090-2594-0425) 佐々木

(詳細は9頁あびこ日より121号をご参照下さい)

元会長・役員の墓参について(報告)

当会の会長、役員を務めた三谷和夫元会長、戸田七支元幹事、美崎大洋前会長の三名の方々が一昨年相次いで逝去されました。

三谷氏は、昭和五五(一九八〇)年志賀直哉邸の保存活動の先頭に立ち、当会の設立に尽力され、長年第二代会長として今日の基盤を築いてくれました。

戸田氏は、柳田國男研究や平将門研究等において独創的な知見を深め、幹事として役員を務められました。美崎大洋氏は、杉村楚人冠研究に深く精通し、「あびこ今昔ものがたり」を著わすなど、地域の歴史や文化を



深く幅広くまとめられ、第四代会長として長年活躍してこられました。

四月に市内緑の天神山に建立することが出来ました。

去る十一月一七日(月)、現役員五人

がこの様に活躍された三名の元役員の墓地を巡り、ご自宅訪問し、献香し、哀悼の気持ちを捧げました。(芦崎)



編集後記 ▼今年は午年。干支では丙午(ひのえう)までである。六〇年前の丙午は、昭和四一(一九六六)年。この年一三六万人が出生した。しかし、前年よりも約四六万人が減少した。原因は丙午の女性性は気が強いという江戸時代の「八百屋お七」になぞらえた迷信により出産を控えたと言われている。根拠のない女性差別により人々の行動変容があった。しかし二〇二四年の出生数は、六八万人となり、七〇万人を初めて割り込んだ。人口減少は、社会の在り方に関わる根源的な問題、早急な対応が必要ではないか。

▼正月早々、アメリカ軍がベネズエラを攻撃し、大統領マドゥロ氏を拘束、妻と共にアメリカ国内に移送した報道があった。民主主義、人権尊重、そして国連憲章や国際法の観点からしても、一国の主権を侵害する事案は決して看過できない。愚かしい。(あしたか)